

ホテル・アストリヤ

上水敬由

二月の終わり、妙に暖かい日々が続いたのち、久しぶりにこの季節らしい寒風が吹いた日のことだ。思い立って「救護看護婦竹田ハツメ」展を観に行った。

国道三号線を南下して松橋バイパスに入る。ゆるやかな勾配の脇道を上ったところに熊本県松橋収蔵庫があった。もとは自動車運転免許試験場で、いまは県の博物館ネットワークに含まれている。

無人の展示室をゆっくりと歩いた。

日本赤十字社救護班一行は一月半の船旅を経てフランスに到着し、大正四年三月一四日から大正五年七月一日まで、パリ凱旋門近くのホテル・アストリヤを改装した戦時病院において戦傷病患者の治療にあたった。

使用したトランクや外套、『仏国派遣救護班勤務心得』『仏蘭西語独修』などとともに彼らの写真や絵葉書が掲示されており、みな一様に小柄であった日本人の当時の面影を偲ぶことができる。

いかにも記念写真然としたホテル前での集合写真や、バルコニーに出てひとりポーズをとった写真などのいずれにも漂っている緊張感は、彼らの任務の重さによるものだろう。

兵頭二十八はいう。「大正三年七月、第一次欧州大戦が始まった。戦いがたけなわになると、日本が奉天会戦のためにかき集めた数十万発の砲弾のごときは、ある国の砲兵隊がわずか1日で射耗する分量でしかなかった」

竹田の手帳には「砲創」「爆傷」などの文字が並んでいる。

塩田広重東京帝国大学医科大学助教授の指揮の下、彼らが「救護」した戦傷病患者の数は、『日本赤十字社熊本県支部史 事業編』によれば「実人員九一〇人、延べ人員にして五四、八三二人」だった。

『仏蘭西だより』で、島崎藤村が友人とともにホテル・アストリヤを訪れたのは、案内した塩田が四月三日に催された開院式を「近いうちに」と言っているので、おそらく三月末のことだろう。

饒舌な塩田の口ぶりから島崎が受けた印象は、「外科医としての塩田君は腕が鳴って居るかのよう」だったという。当初五ヶ月間の予定だった「派遣」が、戦闘の激化にもない、フランス政府からの要請によって二度にわたる延長を余儀なくされることなど予想もできない時期のことだ。

救護班がポアンカレ大統領の謝辞とともに帰国した二年後、第一次大戦もようやく終わりを迎えようとする大正七年に、蜷川新は徳川慶久に随行してヨーロッパに渡った。

各国赤十字社の国際的連合体として「赤十字社連盟」が大正八年に設立されるが、蜷川は日本代表としてそれに関与したという。『私の歩んだ道』で「人道、平和上の一事業であることを、私は信じている」と自慢している。

ところが『戦後強制抑留史』によれば、第二次大戦後、ソ連が日本人に対して行った「強制抑留」について、蜷川は「在外の日本人が、そこに留することを、望んでいるならば、日本人が、それを日本に帰還せしめようと執つこく運動するなどは、憲法違反である。人権無視である。日本人は、憲法を守るべきである」とする。

老耄の無惨と見るべきか。

それとも竹田や塩田などと異なり、通訳と筆耕と講演で世を渡ってきた口舌の徒としての冷たい性根が露呈しただけのことか。

松橋収蔵庫は環境整備作業中だった。どんよりと曇った空の下で、土木工事の資材が配置されている間を作業員たちと小型の工事車両が動いていた。